『うつほ物語』「内侍のかみ」巻における仁寿殿の女御をめぐる小考

――朱雀帝の語りから――

勝亦志織

はじめに

『うつほ物語』「内侍のかみ」巻において、時の帝である朱雀帝は、仁寿殿の女御や俊蔭の娘と対話を重ねる。そのような「内侍のかみ」巻を、室伏信助氏が次のように位置づけておられる。

「内侍督」巻は天皇を描いた物語である。物語文学においてはじめて、古代の帝王の内面が一貫して克明に描き出された物語である。そのディテールは、精妙なことばの造成によって現出される。それを具体的に担う表現として対話がもっとも特徴的であり、何よりそれを正確に読み解くことが必要であるが、誤字誤脱や典拠不明の辞句等を含み、容易ならざる言語状況を呈している。[1]

天皇を描くために、物語は対話という表現形式をとったともいえるだろう。『うつほ物語』の描写の中において、対話によって物事が決定していくありかたは「内侍のかみ」巻以前にもあった。例えばあて宮求婚譚において源正頼、その妻である大宮、そして宮中の情報を提供する仁寿殿の女御の三人の対話によって、あて宮の春宮入内は本格化していくこととなる。そうした方法は記述を省略しない『うつほ物語』の特徴でもあるが、今回取り上げる「内侍のかみ」巻においても同様である。この巻で朱雀帝は、長い対話を仁寿殿の女御や俊蔭の娘と重ね、それが今後の物語の軸となる部分を構築していることはすでに「内侍のかみ」巻の問題として論じられているところである。(2)

「内侍のかみ」巻以降、なぜ帝がここまで語らなくてはならないのかと疑問に思うほど、朱雀帝はよく語る。もちろん、それはあて宮求婚譚を終えた物語が新たな物語を紡ぎ出すために必要な方法であったのだろうし、帝が「ことばの主宰者(3)」として、源正頼とは別の祝祭空間を立ち上げていることに異論はない。しかしながら、本論では、語る帝という視点から、朱雀帝が自身の后妃の一人である仁寿殿の女御と対話する場面に着目したい。『うつほ物語』前後の物語を見ても、ある特定の巻とはいえ、ここまで帝が語ることを描いた作品はほとんどない。かろうじて『夜の寝覚』の帝が、寝覚の上に自身の恋情を切々と語り、そして自身の后である中宮にも語る場面があり、『うつほ物語』の朱雀帝の語りは、この『夜の寝覚』の帝の造型へと発展していくのではないだろうか。

なぜ帝が語るのか、そしてその相手がなぜ仁寿殿の女御であるのか。本論は朱雀帝の語りによって立ち上がる世界が物語にどんな意味を与えるのかについて考察していきたい。

一、帝の対話を引き受ける存在―仁寿殿の女御の意味―

「内侍のかみ」巻において、冒頭の仁寿殿の女御との対話は、これまでの先行研究が明らかにしているように、帝が自身の女御と臣下との恋を許容するという点で、非日常的な色好み空間を作り上げ、朱雀帝は帝の権威を構築する。だが、ここで気になるのは、その対話の相手が仁寿殿の女御であるということだ。朱雀帝にはすでに藤原兼雅らの姉妹で春宮の母である后の宮がおり、仁寿殿の女御は朱雀帝の女御の一人にすぎない。なぜ、ここでの対話の相手が后の宮ではなく仁寿殿の女御でなくてはならなかったのだろうか。

もちろん、朱雀帝の仁寿殿の女御への寵愛は深く、多くの皇子女を儲けているし、「内侍のかみ」巻冒頭の場面でも朱雀帝により再びの懐妊が疑われている。一方で、朱雀帝には他にも女御や更衣が複数いることがこの「内侍のかみ」巻で明らかにされている。臣下との恋や宮中における祝祭的空間を立ち上げるためであれば、対話の相手は仁寿殿の女御でなくともかまわないのではないか。むしろより非日常の空間を立ち上げるのであれば、后の宮がその相手であってもおかしくない。女御と臣下の恋よりも、国母皇后と臣下の恋のほうが明らかに密事の色濃い設定になろう。朱雀帝の対話の相手が仁寿殿の女御であったことは、そうでなくてはならない確固たる理由があったことになる。

その点を「仁寿殿」という女御の居所としては異例の殿舎であることは見逃せないだろう。栗本賀世子氏は史上における仁寿殿の使用例から仁寿殿を后妃が局とすることはなかったことを論じ、一見史実に反する仁寿殿の女御の設定は、「仁寿殿女御方の朱雀後宮における勢力を示すために、意図的に為されたものであり、源正頼一

族が政治の主導権を握っていることを読者に知らせるもの」と論じた。[4] 朱雀帝後宮における立后・立坊争いの敗者とはいえ、嵯峨院が「行く先なり出でぬべき人なり」（藤原の君　六七）[5] と認めた正頼の、その大君を、仁寿殿という帝の居所として使われた歴史のある場所を殿舎として使用することで厚遇したことは理解出来る。

だが、本論では仁寿殿の女御その人へと視点を向けたい。そもそも「内侍のかみ」巻冒頭は、「かくて、七月ついたち頃、帝、仁寿殿の、大将の御息所の御局に渡り給ひて」（内侍のかみ　三七七）と始まり、「仁寿殿の」と「大将の御息所」の居所が明確にされ、帝が仁寿殿を訪れることが述べられている。大将の御息所である正頼大君の居所が仁寿殿であることが強調された文章である。栗本氏も指摘しているが、[6]「内侍のかみ」巻より以前に、源正頼の大君が仁寿殿を居所とする女御であると表記するのは次に引用したようにわずか三例である。

①なほ、この九をば、少し心異に思へども、内裏には、仁寿殿候ひ給ふ、いかがは、または。（嵯峨の院　一七五）

②内裏にては、仁寿殿などにても、時々召して、物のたまひなどはせずやは。（祭の使　二三六八）

③源中将の沈の破子、片面は、仁寿殿の女御の御もとへ奉り給ふ。（あて宮　三六八三）

このうち、①はあて宮の結婚問題を相談する正頼と大宮の会話における大宮の言葉の一部、②は、仲忠と孫王の君の会話における仲忠の言葉の一部、③は涼からあて宮のもとに贈られた破子の半分が仁寿殿の女御のもとに贈られたことを示す地の文である。①③は正頼大君を示す表記となっているが、②については仁寿殿の女御を指すとは明確ではない表現となっている。「内侍のかみ」巻より前の巻々での正頼大君の呼称は、右記の三例を除くと「御息所」または「女御」であり、「内侍のかみ」巻以降において「仁寿殿」の呼称が増える。この呼称の変化と「内侍のかみ」巻における相撲の節会等の描写を考えた時、「内侍のかみ」巻は新たに正頼大君を「仁寿殿

の女御」として位置付け直す巻と言えるのではないだろうか。

「仁寿殿」を居所とする帝寵愛の女御。帝はそんな存在である仁寿殿の女御を対話の相手として選び、彼女と臣下の恋を語るのである。この対話の相手が后の宮ではなく仁寿殿の女御であったことの意味は、次節において仁寿殿の女御がどのように帝と対話し、そして帝の語りの中に位置付けられていくのかを確認してから考察したい。

二、帝の語りⅠ　―仁寿殿の女御の手紙をめぐって―

「内侍のかみ」巻冒頭の朱雀帝と仁寿殿の女御の会話は次のように始まる。

かくて、七月ついたち頃、帝、仁寿殿の、大将の御息所の御局に渡り給ひて、「などか、昨夜、蔵人奉りたりしかど、参上り給はずなりにし。あやしく、日ごろ、度々、迎へ人を返し給ふかな。もし、思し怨ずることやある。あないとほし」。御息所、「怨じ聞こえさすべきことや侍るらむ。まめやかには、日ごろ、暑気にや侍らむ、あやしく、悩ましく思ひ給へられてなむ、参上り侍らぬ」。「それこそは、参上り給はば、さも思さざらめ。まこと、なでふ悩ましさぞ。もし、例のことか」。「あな見苦し。今は、よにも」。（内侍のかみ　三七七）

女蔵人を使いに出しても、ちっとも参上しない仁寿殿の女御に対して、朱雀帝が仁寿殿に訪れて参上しない理由を問うところから始まっている。「暑気」を理由にした女御に対し、清く涼しい「清涼殿」に参上すればよいのにと言葉遊びでの応酬を経て、帝は女御の懐妊を疑う。続く文章では、帝は最近では密かに思いあっている恋人達が多いようだと語り、あなたも密かに愛し合う人がいるだろうと疑いを掛けていく。その相手として疑われて

いるのが右大将、藤原兼雅である。以下、長くなるが、二人の対話を引用する。

『げに、知り給はずや。つれなく、なものせられそ。かくのたまはむからに、①右大将疑はむ」。御息所、「まして、これこそ。人の上にても、『空言』と思ほえぬ」。上、「あやしう、心憎く労ある人なればこそ。さ見つつある。異人は難からむかし。知りて惑はむことは、そがうちにも、また、許す所なむある。かの兵部卿の親王、はらからとも言はじ、少し見所ある人なり。まづ、うち見るにも、かの君を女になして持たらまほしく、さならずは、我持たれまほしくなむ見ゆる。まして、『少し情けあらむ女の、心とどめて、かの親王の言ひ戯れむには、いかがは、いとまめにしもあらむ』と見れば、『ことわりなり』とて、切にも咎めず、時々の気色をば、物とも思はれずかし。されど、罪免るることどもなむある。そが中に、おもとに大将の朝臣馴らし給はむ、切にも咎めざらまし。『ことわりなり』と見ゆる所ぞ、少しあらまし。さらに、兵部卿の親王、かへりて苦しき人なり。見む人に、心留められぬべき所ありて、吉祥天女にも、『いかがせまし』と思はせつべき大将なり。②それを、少し人にまさり給ふ所は、いと深くなむ知り給はずなりにける。後はおぼつかなけれど」。御いらへ、「あなうたて。さる心やは見えし。異人をこそものせらるめりしか」。「かうのたまふからに、いと悪しからむ」。「③ただ、言ひしが見所ありしかば、ただ文走り書きたるが心ある様なりしかば、『あはれ』など思ひし」など聞こえ給ふ。「空言をのたまふにこそ。さらば、疑ひ聞こえむ」。「なでふ空言にかあらむ」。「④時々物聞こえ、今もあめるは」とのたまふ。御息所、「いさや、『さ思はるる心やありけむ』など、しるく見ゆることもなかりし。この、春宮に候ふが、まだ里に侍りし時こそ、『さ思ふこともやあらむ』と見給へしか」と聞こえ給ふ。（内侍のかみ　三七七～三七八）

傍線部①のように仁寿殿の女御と兼雅の関係を疑い、兵部卿の親王を引き合いに出しながら、兼雅は親王以上

に魅力のある人物であって惹かれることも無理はないとしながら、傍線部②のように女御が他の人より優れている所は、兼雅に対して深く関わることなく終わったことだとする。女御は傍線部③で兼雅の手紙や言葉使いに風情があったと手紙のやりとりを認めてしまうため、帝からは傍線部④「時々物聞こえ、今もあめるは」と、今も手紙のやりとりは続いているのを知っているのだと切り替えされる。先行研究によって「奇妙な会話」と位置付けられるものであり、臣下との恋を容認する色好み的祝祭空間を立ち上げるための会話とされるものだが、ここで興味深いのは、この後の記述において仁寿殿の女御の手紙そのものが登場することである。

物語の流れとしては、この朱雀帝と仁寿殿の女御の対話は女一の宮に仲忠を婿取る話へと続き、その後に正頼ら上達部はじめ春宮までもが仁寿殿に参集し、節会論を交わす。そして、正頼と大宮による娘たちの婿取りについての対話をはさみ、正頼邸に兼雅と仲忠が訪れ、正頼と兼雅の昔の恋が語られることとなる。この昔の恋の相手が正頼は嵯峨帝の承香殿の女御、兼雅は仁寿殿の女御なのである。

正頼と嵯峨帝の承香殿の女御

「世の中の、心行き、なほをかしきものは、労ある女の情けあるが、物言ひかかりなどするが、この女の、『いかにせまし』と思ひわづらへるが、心とどめて書きたる文見るばかり、労あるものこそなけれ。昔、嵯峨の帝の御時、承香殿の御息所ばかりの女を見給へぬかな。（中略）いかなる折にかありけむ、聞こえ始めて、後々は、せめて聞こえわづらはすほどに、『思しわづらふにやあらむ』と見えしほどの御文見給へしこそ、よにあはれに労ありしか。（後略）」（内侍のかみ　三八八）

兼雅と朱雀帝の仁寿殿の女御

「今の世の女の深くありがたき御心は、仁寿殿の女御こそおはしますらめ。この承る承香殿に、さらに劣ら

ぬ御心なり。（中略）昔、聞こゆることありしを、さらにのたまひ放たで、『頼め』とのみあらせつつ、多くの好き言を御覧じたるなむ、いとありがたき。今に、いとたまさかに聞こえさする時など、同じやうなるものから、遠き御心は、なほ同じやうなれど、多くの好き言をなむ御覧ぜられぬる」（内侍のかみ　三八九）

「昔」「今」の対照に、嵯峨帝の承香殿の女御、朱雀帝の仁寿殿の女御がそれぞれ正頼と兼雅から紹介される。そして、どちらも息子に命じてそれぞれの女性たちから贈られた恋文を取りに行かせる。文競べという不思議な空間が立ち上がるわけだが、ここで仁寿殿の女御の手紙そのものが物語に登場する。

物語冒頭における朱雀帝の語りの中で、仁寿殿の女御が兼雅と手紙のやりとりをしていたことが語られたわけだが、場所が正頼邸に移るとはいえ、仁寿殿の女御の手紙、それも恋文の実物が登場する。あたかも朱雀帝の語りが実体化したようでもある。二人の女御の手紙は次のように評価される。

右大将のをば、白銀の透箱のいと清らなるに、敷物などいとめでたし、それにつれて、この殿のを、錫の虫食みなどしたるに、文削り出だしなどしたるに、唐草・鳥など彫り透かしてあるに入れて、御覧じ比ぶるに、さらに劣りまさらず、いと等しき、手・詞、劣りまさらず、等しき時に、あるじのおとど、「仁寿殿は、うるせき人にこそありけれ。昔より後の世までの、いはゆる嵯峨の御時の女御ぞかし。今、それに殊に劣らぬ手など走り書きけり。など、正頼がもとに遣する文、これにおぼえたる筋の思ほえぬ」とのたまふ。右大将、「かへりて、この御文は、今めきたる筋などまさりたりけり。持なり」と定められて（内侍のかみ　三九〇）

二人の女御の手紙は筆跡も内容も「等しき」様相を呈し、仁寿殿の女御の手紙を見た正頼は自分のもとに送ってくる手紙とは趣が違うという感想を述べている。父親への手紙と恋文とは違いがあることが父親によって認定されているのである。兼雅からは「今めかしさ」を評価されており、判定は引き分けとは言え、仁寿殿の女御の当

世的な手紙は今上帝の女御として今を時めく彼女にとって当然の評価といえよう。

朱雀帝の語りによって兼雅との手紙のやりとりが示された後に、兼雅のもとに保管されていた仁寿殿の女御の手紙が登場する。書かれたモノとして残っていた手紙が登場することによって、朱雀帝の語りは過去にあった出来事として実体化する。朱雀帝の語りによって立ち上がった仁寿殿の女御と兼雅との唐突とも思える恋物語は、兼雅の保管していた手紙によって証拠立てられ、二人の過去を現前化してしまう。この文競べについては、朱雀帝の語りと照応するように臣下達が后妃への思慕の心情を示したことは指摘されているが、手紙そのものとのつながりについてはまだ明確に意義づけられていないように思う。だが、朱雀帝の語りを、仁寿殿の女御との恋を疑われた本人である兼雅が手紙を持ち出すことで証明してしまうというロジックこそ、ここでは重要なのではないだろうか。

この後、物語はかつて嵯峨帝の承香殿の女御が内宴の「賄ひ」を勤めたように、仁寿殿の女御が「賄ひ」を勤める相撲の節会に進んでいく。正頼と兼雅の対話によって后妃となった女性たちとのかつての恋物語が描かれることは物語の展開上、その前に取りざたされた節会論と関わり、その節会が仁寿殿で行われることになることで、朱雀帝の帝としての威信をかけた盛儀が展開することになる。そしてその主役こそ仁寿殿の女御なのである。

一において、朱雀帝の対話の相手がなぜ后の宮ではないのか、という問題を提起したが、相撲の節会もまた后の宮の具体的な登場はない。もう一人、朱雀帝が弟である兵部卿の親王との恋を疑った承香殿の女御が仁寿殿の女御と同様に「賄ひ」を行い、さらには式部卿の女御や十人の更衣など、既に大井田氏によって指摘のあるように「宮中を舞台とすることによって、華やかな後宮の全貌が明らかにされた」のである。[7] その後宮の全貌が明らかにされた中においても主役は仁寿殿の女御であり、栗本氏が「後宮における真の華で臣下たちの憧憬の対象と

なるのは、后宮ではなく仁寿殿女御[8]」であるのだろう。

しかし、ではなぜここで宮中の主役は仁寿殿の女御だと表明する必要があるのだろうか。先述したように、朱雀帝によって語られた仁寿殿の女御と兼雅の恋物語は兼雅が保管していた仁寿殿の女御の手紙によって、実際に過去にあった出来事として現前化する。それは物語前史の現前化でもあり、単に臣下と后妃の恋をも許容する色好み的祝祭空間を立ち上げるためだけではあるまい。「内侍のかみ」巻の位置を考えた時、あて宮求婚譚との関わりを考えてみる必要はないだろうか。

室城氏はあて宮求婚譚においてあて宮が結果的に春宮に入内することとなる経緯を、物語前史としての朱雀帝後宮における仁寿殿の女御の立后・立坊争いについて指摘された[9]。仁寿殿の女御は〈プレあて宮〉ともいうべき存在だったのである。そして、この「内侍のかみ」巻においても、朱雀帝の語りによって仁寿殿の女御は〈プレあて宮〉として現前化されたのではないか。再び、朱雀帝の語りを見てみたい。

三、帝の語りⅡ　―仲忠とあて宮をめぐって―

朱雀帝は、仁寿殿の女御と兼雅との関係を疑った後、仁寿殿の女御が兼雅はあて宮にこそ求婚していたと反論し、自身に向けられた疑惑を晴らそうとする。それを受けて朱雀帝は、次のように述べる。

「それ、はた、さかし。いづれの世界にか、男とあるがあしこ言はぬがなかりし。纏はりなき致仕の大臣高基の朝臣さへ、言ふことありけむかし。これになむ驚きにし、『あやしくものせらるる人なりけり』とは。そが中になむ、『いと切に言ふ人々あり』と聞きしかど、[1]仲忠は、天下にめづらしき心あらむ女も、あれ

だに少し気色あらば、え忍ぶまじき人ぞかし。「それを、いかによそに見ては、いかにあらむ」と思ふなむ、『いと心憎くありがたき御心』と、いよいよ思ほゆる。②今も、なほ、その心失すまじかし」。御いらへ、「③さるは、かのあてこそも、見る所やありけむ、異人よりは返り言せまうくは思ひたらざりしを、かの仲忠も、さもや見けむ、『いとあはれ』と思ひぬべきこと多くすめりしかど、まめやかに思はでやみぬめりきや」。上、「あはれなることどもかな。かの中に通はされけむ文、いかに興ありけむ。かれを見ばや。（後略）」

（内侍のかみ　三七八～三七九）

朱雀帝は、あて宮の魅力を認め、あて宮の求婚者の中から仲忠について言及する。傍線部①のように、どんな女性であっても仲忠が少し好意を示したらすぐになびくだろうと評価し、あて宮がよく仲忠に心動かされなかったと感心している。だが、問題は傍線部②「今も、なほ、その心失すまじかし」であり、まだ仲忠があて宮を思慕していることを推測しているのである。この朱雀帝の言葉に対する仁寿殿の女御の返事が傍線部③である。あて宮もまた仲忠には特別な気持ちをもっており、仲忠の手紙はあて宮が感動するものであったらしいが、結局あて宮は仲忠には本気にはならなったと述べている。そして、朱雀帝は二人の間に交わされた手紙に興味を示しているのである。

春宮に入内したあて宮に対して、かつての求婚者の中でも特に優れた者が今でも彼女を思慕していること、二人の間に交わされた手紙の内容が素晴らしいものであったこと、そして、第三者がそれを見たいと思うこと、この構図は、二で確認した、仁寿殿の女御と兼雅の関係と同じである。朱雀帝―春宮、仁寿殿の女御―あて宮、藤原兼雅―藤原仲忠という対応関係がここから浮かび上がってくる。春宮入内という結果に終わったあて宮求婚譚を読み進めてきた読者はこの巻で、正頼大君においても同様の求婚譚があったのではないかという可能性を朱雀

帝の語りによって示されているのではないか。仁寿殿の女御もまた、あて宮と同じように求婚者たちを振り切って朱雀帝へ入内した過去が見えてこないだろうか。そして、仁寿殿の女御が朱雀帝の寵姫であることを付け加えれば、春宮の寵姫であるあて宮は春宮が即位後の後宮における主役となることも予祝されているのかもしれない。しかし、帝の語りはこの後、仲忠の婚姻問題に発展し、自らの女一の宮に仲忠を婿取ることに発展していく。

朱雀帝の語りは、女一の宮との婿として仲忠がいかに優れているかを語りだす。涼と比較しても「あやしく、見るに心行く心地して、世間のこと忘るる人になむある。涼の朝臣、えこそ等しからね。」（内侍のかみ　三七九）と評価し（「世間のことを忘るる人」を女一の宮だとする説もあるが、次に続くのが涼のことであり、ここは仲忠と涼の比較と考え仲忠のこととととる）、さらに言葉を尽くして「ただ今の見目よりも、かく具したる才に、かたち・心なども過ぐれば、ただ今より、おぼえまさりなむ」（内侍のかみ　三八〇）と語る。この表現は、大宮に正頼を婿取ることを決めた時の嵯峨院の「ただ今の見る目よりも、行く先なり出でぬべき人なり。」（藤原の君　六七）という正頼を評価する言葉と重なる。[10] とはいえ、先ほど見たように仲忠が入内したあて宮をまだ思慕していると述べたすぐ後に、自分の皇女との婚姻を進めるというある意味では強引な朱雀帝の語りがここにはある。

さて、再び仲忠とあて宮のことについて考えるために、相撲の節会当日の状況を見てみたい。朱雀帝は相撲の節会当日、仁寿殿の女御と兼雅の様子を次のように見つめている。

「この女御と大将と、さてあらむに、なかるまじき仲にこそありけれ。これを、同じ所に、労あらむ所に据ゑて、情けあらむ草木、花盛りにも紅葉盛りにもあれ、見所あらむ所の夕暮れなどありて、行く先を言ひ契り、深き心言ひ契らせ、かたみに、あはれならむことを、心とどめてうち言はせ、をかしきさはらせむに、

けしうはあらじ。なほ、聞き見む人、目とどめ、耳とどめ、見ざらむやは。見えし。さてあらせて聞かばや」など思しつつ、まぼりおはしますに、賄ひうちしなどし給ふにも、いとらうらうじう、まことに、大将の相撲のことなど行ひ給ふにも、いと心深き労の見ゆれば、「あやしく、似たる人の心様にもあるかな」と御覧じて、御前に、いと面白き女郎花の花のあるにつけて、外にさし出だし給ふ。（内侍のかみ　三九七）

いささか意味不通な箇所があるが、朱雀帝が仁寿殿の女御と兼雅の二人が恋愛関係にあったら、これ以上はないだろうと考え、二人の一挙手一投足を見つめている。仁寿殿の女御が「賄ひ」を行うのは、兼雅と一緒に節会に奉仕する姿を朱雀帝が見たいからだったのかと思うほど、朱雀帝は二人を見つめ、二人の恋愛を幻視する。この後には、女郎花を題に詠んだ歌の真意を尋ね、兵部卿の親王、兼雅、正頼、仲忠の順に答えとなる和歌を詠み合う場面が続く。そして、この日の夜には、同じように兵部卿の親王と承香殿の女御の姿も同じように見つめ、杯を取りながら同じように和歌を詠み合う場面が続く。[11]

和歌のやりとりを通して、朱雀帝は自身の后妃を思慕する臣下の思いを忖度するわけだが、女郎花の唱和において仲忠は朱雀帝の真意を見抜き、さらには女一の宮との婚姻を承諾するかのような和歌を詠む。仲忠の機転の良さに朱雀帝は破顔することとなり、こうした仲忠の機転の利く様子は、「内侍のかみ」巻に散見される。仲忠の人物造型において、朱雀帝の意図や真意をはかることのできるという側面がこの巻において示されたといえよう。

しかし、その仲忠も、弾琴を求められそうになると姿を隠してしまう。その隠れ先はあて宮の局である。ここであて宮が相撲の節会に参上していなかったことがわかるが、朱雀帝によってあて宮思慕を認定されている仲忠があて宮の局に隠れたのである。あて宮の局で仲忠は「結ふ手もたゆく解くる下紐」という露骨な言葉を投げか

けることであて宮から直接の返事をもらうことに成功する。高橋亨氏は二人のやりとりを「歌ことばによる表現ゆえに、このような露骨なまでの恋のくどきも可能」とし、仲忠がこの巻において「ことばの技芸によるトリックスターの機能」を果たすと論じている。[12] 二人のやりとりは疑似恋愛的な言葉遊びであるのだろうが、春宮妃と臣下という関係性において、朱雀帝の予想する関係を実体化してしまったようでもある。

仲忠は「内侍のかみ」巻において、物語後半の主役として位置づけられることになるわけだが、その位置づけられ方は、朱雀帝の語りによって立ち上がった複数の臣下と后妃の恋をベースにしている。[13] 朱雀帝―仁寿殿の女御―兼雅、あるいは朱雀帝―承香殿の女御―兵部卿の親王という三者の関係が、春宮―あて宮―仲忠に引き継がれていくかのように描かれている。そして、仲忠がどれほど素晴らしい人物であるのかということが、「内侍のかみ」巻では何度となく語られる。その最たるものが、あて宮のもとに隠れていた仲忠が兼雅に見つかり戻ってくる場面である。

かくて、夕暮れに、藤壺より参り給ふ。侍従なりし時よりも、この頃は、いとめでたきかたちの盛りなり。父おとど、さるかたち人にて、連ねて参り給ふに、さらに親子とも見えず、ただ一つ二つの弟兄に見えたり。左大将のおとど、見給ひて、「こともなき随身かな。中将の朝臣の今日の随身、いと見苦しや」と遊びおはしまさふ。左近大将、「右大将、左の府のかの随身し給ふなり。いかが、同じ府の仕うまつらざらむ」とて、仲忠を前に立てて、左、右大将後に立ちて参り給ふ。（中略）仲忠、夕映えして、そこらの人にもすぐれてめでたく、かたちの清らなるよりも、さし歩みたる様・うち思ひつる気色、さらに人に似ず、なまめきらうらうじ。（内侍のかみ　四一一）

侍従であった頃より優れ、「めでたきかたちの盛り」とされる仲忠であるが、正頼、兼雅という左右大将を従

えての登場である。仲忠が際立っている様子が具体的に表現された箇所である。華々しい登場を演出された仲忠はこの後、朱雀帝との碁に負け、再び弾琴を強要されたことから、母である俊蔭の娘の参内に発展していくのであるが、仲忠が今後の物語の主人公としてふさわしい存在であることを強く印象付ける場面がここに置かれていることは重要なのではないだろうか。朱雀帝の真意を推測できるだけの有能さを持ち合わせ、他の人よりも卓越した姿かたちを持つ仲忠。朱雀帝が「かく具したる才に、かたち・心なども過ぐれば」と仁寿殿の女御に語った通りの姿がここで明らかにされたのである。

そしてもう一点、仲忠とあて宮の関係もまた、朱雀帝の予想に当てはまるものであった。むしろ予想を超えるほどの露骨さで仲忠のあて宮への思慕が表現されている。だがここで、兼雅と仁寿殿の女御の関係と同じように、仲忠がまだあて宮に未練を残していることを節会という非日常的な空間において大げさに表現されることには意味がある。なぜなら、兼雅は非日常の宮中から退出し屋敷に戻れば、そこには俊蔭の娘という無二の存在がいるからだ。「内侍のかみ」巻はその俊蔭の娘までも宮中に参内させ、朱雀帝は尚侍という役職を与える。朱雀帝・仁寿殿の女御・兼雅の三者の関係に俊蔭の娘が加わった構図となるのである。先ほど見たように、朱雀帝はある意味強引な語りで、仲忠と女一の宮の婚姻を推し進めている。それは「天子空言せず」の理念に基づいたものではあるが、自身の語りによって浮かび上がらせた朱雀帝・仁寿殿の女御・兼雅・俊蔭の娘という四者の関係を春宮・あて宮・仲忠の関係に重ねた時、俊蔭の娘の位置に女一の宮を据えようとする意図が見えては来ないだろうか。仁寿殿の女御に未練を残しながらも、俊蔭の娘一人に愛情をそそぎ大切にする兼雅と同じように、仲忠もまたあて宮に未練を残しながらも、女一の宮一人を大切にする可能性を朱雀帝の語りは導き出していよう。そしてそれは「沖つ白波」巻における婚姻後すぐに実現することとなる。

おわりに

朱雀帝の語りは、複数の后妃と臣下たちとの恋を立ち上げ、それを現前化するような場を節会の空間の中に提供していった。だが、それが仁寿殿の女御との対話から始まったことをもう一度ふまえることでまとめとしたい。二において、仁寿殿の女御とあて宮の重なりを指摘した。朱雀帝に入内する前にあったであろう正頼大君への求婚譚を朱雀帝の語りは想起させ、その証拠となる手紙までもが敗者たる兼雅のもとから示された。これまでの物語には描かれてこなかった仁寿殿の女御のヒロイン性を、朱雀帝は自らの語りによって示し、そして節会の空間において後宮の主役として描き出したといえよう。そして、それは今後の物語のヒロインたる女一の宮の存在にも関わってくるのではないだろうか。

「沖つ白波」巻における仲忠との婚姻以降、女一の宮にはあて宮に劣らないほどの女性だという格上げが為されていくが、その前段階として母である仁寿殿の女御の存在の大きさが「内侍のかみ」巻で描き出されたと考えられる。そのように考えると、「内侍のかみ」巻冒頭の朱雀帝の対話の相手や相撲の節会の主役が后の宮ではなく仁寿殿の女御であった意味も理解出来る。仲忠を婿取る女一の宮の素晴らしさを母である仁寿殿の女御から描き出したのである。女一の宮は、正頼が婿取られた大宮のように后腹ではないけれども、多くの貴公子が求婚した、そして帝の寵姫となった今でも思慕の念を持つ臣下がいるほどに美しい仁寿殿の女御の娘である、という価値付けが仁寿殿の女御を主役として描く一つの意義であったのではないだろうか。

そして、それは婿取られる仲忠も同様である。相撲の節会において機知や具体的に麗しい姿が描写されたのを

はじめ、巻の後半、俊蔭の娘を参内させる支度等を滞りなく果たし、最後には俊蔭の娘を朱雀帝に見せるための蛍までも率先して集める。朱雀帝にとって仲忠がなくてはならない存在として描かれていくのである。加えて、俊蔭の娘もまた朱雀帝と音楽論を交わしながら弾琴し、巻名の通り尚侍に就任し、朱雀帝からは「私の后」とまで呼ばれるようになる。すでに猪川氏により仲忠の「うつほ住み」という欠点が俊蔭の娘の尚侍就任によって解消されたことが指摘されている[14]が、俊蔭の娘を公的な立場のある人物として厚遇し、ましてや帝が思慕する女性として認定することで、その息子である仲忠もまた自らの容姿・能力とは別の形の格上げを為されることとなる。

これにより、仲忠を女一の宮に婿取る準備が出来た。非日常的空間における約束が必ずしも現実にならないことは、これまでも何度か描かれてきた。しかし、この「内侍のかみ」巻は朱雀帝の語りによって導き出された空間であり、それが「帝」のことばによるがゆえに、俊蔭の娘の尚侍就任は揺らぐことなく、そして、冒頭において示した女一の宮と仲忠の婚姻は「沖つ白波」巻で現実のものとなるのである。

「内侍のかみ」巻はこれまでのあて宮求婚譚において主たる存在ではなかった複数の登場人物たちを一度に主役級に位置づける。その様相は複雑であり、本論はその一部を先学に拠りながら試みたものである。だが、仁寿殿の女御について、その存在がどのような意味を持つのか、今後より多面的な解釈が必要なのではないだろうか。本論は朱雀帝の対話の相手という視点からみたが、帝と后妃の対話の持つ重さは後の物語にも影響を与えているだろう。はじめにで示した『夜の寝覚』の帝は、自分の寝覚の上への思慕を中宮に語る。すでに指摘のあるように、『うつほ物語』の朱雀帝と俊蔭の娘の関係は『夜の寝覚』の帝と寝覚の上の関係に影響を与えているが、『夜の寝覚』の中宮に仁寿殿の女御を重ねてみると、また違う世界がそこには見えてくるだろう。この『夜の寝覚』の問題については、今後の課題としたい。

注

（1）室伏信助「物語文学の作者」（『体系物語文学史』第二巻、一九八七年　有精堂→『王朝物語史の研究』（一九九五年、角川書店）に収録）

（2）「内侍のかみ」巻については成立論を中心に研究が進められてきたが、近年、巻の内容や構成についての論が積み重ねられてきている。三田村雅子「宇津保物語の論理―視察の時間と日常の時間と―」（論集中古文学2『初期物語文学の意識』一九七九年　笠間書院）竹原崇雄「宇津保物語「内侍のかみ」における物語的世界の構造―稲賀氏の「クイズ的享受法」による解明―」（『国語と国文学』六〇巻四号、一九八三年四月→『宇津保物語の成立と構造』（一九九〇年、風間書房）に収録）、三上満「宇津保物語・初秋巻の方法」（『中古文学論攷』五号、一九八四年一〇月）、高橋亨「長編物語の構成力―宇津保物語「初秋」の位相―」（『講座日本文学』第四巻、一九八七年　大修館書店→『物語と絵の遠近法』（一九九一年、ぺりかん社）に収録）、室城秀之a「『うつほ物語』―「内侍のかみ」の巻―の会話文について」（『高校通信』二五巻七号、一九九一年→『うつほ物語の表現と論理』（一九九六年、若草書房）に収録）室城秀之b「作られた過去へ「内侍のかみ」の巻における「吹上の宣旨」をめぐって〉―うつほ物語の表現と論理」（『国語と国文学』六八巻十一号、一九九一年十一月→『うつほ物語の表現と論理』（一九九六年、若草書房）に収録）、上原作和「金剛大士説話と朱雀帝・仲忠、問答体説法の方法について―『うつほ物語』比較文学論断章―」（『日本文学』四〇巻十二号、一九九一年十二月→『光源氏物語の思想史的変貌―〈琴〉のゆくへ』（一九九四年、有精堂出版）に収録）、大井田晴彦「『うつほ物語』の転換点―「内侍督」の主題と方法」（『国語と国文学』七六巻六号、一九九六年六月→『うつほ物語の世界』（二〇〇二年、風間書房）に収録）、根本智治「内侍督的世界―前半部の会話の論理―」（『講座平安文学論究』第十二輯、一九九七年、風間書房）、猪川優子「『うつほ物語』俊蔭女の〈尚侍物語〉―仲忠の女一の宮降嫁からいぬ宮入内へ」（『国語と国文学』八〇巻七号、二〇〇三年七月）、松野彩「『宇津保物語』「内侍のかみ」巻についての考察―繰り広げられる恋愛模様を中心に」（『国語と国文学』八二巻一号、二〇〇五年一月→『うつほ物語と平安貴族生活―史実と虚構の織りなす世界―』（二〇一五年、

新典社）に収録）、西山登喜「『うつほ物語』擦り寄る朱雀帝と仲忠―笑いを媒介に―」（『物語研究』八号、二〇〇八年三月）、伊勢光「『うつほ物語』「内侍のかみ」巻における帝―「内侍のかみ」巻再考―」（『学習院大学大学院　日本語日本文学』第九号、二〇一三年三月）なお、伊勢氏も『うつほ物語』の朱雀帝と『夜の寝覚』の帝についての共通性を指摘している。

（3）前掲（2）室城氏論文aに同じ。

（4）栗本賀世子「『宇津保物語』仁寿殿女御考―その殿舎をめぐって―」（『東京大学国文学論集』四号、二〇〇九年三月→『平安朝物語の後宮空間―宇津保物語から源氏物語へ―』二〇一四年、武蔵野書院）に収録）

（5）『うつほ物語』の引用は、室城秀之『うつほ物語　全　改訂版』（二〇〇一年、おうふう）により、巻名と頁数を付した。なお、一部私に傍線を付したものがある。

（6）前掲（4）の栗本氏論文に同じ。

（7）前掲（2）の大井田氏論文に同じ。

（8）前掲（4）の栗本氏論文に同じ。栗本氏はこの指摘のところで注47を付し、注において「父正頼の権勢と帝の寵愛を背景に、彼女こそが「賄ひの女御」の中で最も華やいだ存在であり、后宮に唯一匹敵しうる立場の人物であった。」とされる。

（9）室城秀之「あて宮春宮入内決定の論理―うつほ物語の表現と論理―」（『国語と国文学』五八巻七号、一九八一年七月→『うつほ物語の表現と論理』（一九九六年、若草書房）に収録）

（10）『うつほ物語』の皇女の結婚の様相については、拙稿「物語における皇女の〈結婚〉―『うつほ物語』『源氏物語』をめぐって―」（『むらさき』第五〇輯、二〇一三年十二月）において、考察した。

（11）朱雀帝の見つめる兵部卿の親王と承香殿の女御の関係性については、本論では詳細に論じることができないが、承香殿という殿舎の共通性から、文競べで登場した嵯峨帝の承香殿の女御と正頼の関係の置き換えとも読めるのではないか。

（12）前掲（2）の高橋氏論文に同じ。

（13）前掲（2）の大井田氏論文に同じ。
（14）前掲（2）の猪川氏論文に同じ。